



▼ コロナ禍を前向きに生き抜く ▼

校長 阿南 孝也

『コロナの状況下で当たり前を見直す』ことを目的としたアンケート(「幸せ経済社会研究所」2020年7月)は、とても興味深いものでした。任意抽出された「一般」の方々と、環境問題やSDGsに関心の深い「高関心層」に分けて実施されました。主なアンケート結果は以下の通りです。

『食料の入手方法はどう変化しましたか?』という質問には、〈一般〉では「近所で」「短時間に」等が挙げたのに対して、〈高関心層〉では「産地からの取り寄せ」「地元野菜を購入」等の支援型が見られました。また『自由に使える時間の過ごし方は?』には、〈一般〉が「趣味」「断捨離」「自宅で運動や料理」「家族と過ごす」が目立ったのに対して、〈高関心層〉ではこれらの「生活の見直し」に加えて、「ボランティア活動」「オンラインセミナー」に言及する回答が見られました。『この時期に新たに始めたことの中で、コロナ後も続けたいことは?』には、〈一般〉では「手洗いや消毒」の割合が大きく、「元の生活に戻る」との回答もありました。一方〈高関心層〉では「自己啓発」「社会問題」「オンラインセミナー」「ボランティア活動」など、コロナの状況下で始めたことを継続していきたいという傾向が見られました。『人との関係性の変化は?』との質問に対して、〈一般〉では「知り合いに会えない」「ストレスがある」等のネガティブな回答が目立ったのに対して、〈高関心層〉では、ネガティブな回答も見られましたが、「物理的に遠い人と繋がりを持つことができるようになった」「気軽にオンラインで会えるようになった」など、ポジティブに捉えている人の割合が高いこともわかりました。

私たちの多くは、この「一般」と「高関心層」の両面を持ち合わせているのではないのでしょうか。これまで当たり前とってきた友人と過ごす時間やレストランでの会食等の日常が失われたとき、「寂しい」気持ちに陥るのは当然のことだと思います。しかし同時に、できなくなった体験を通して、当たり前の大切さに気づかされて、「当たり前の日常に感謝の気持ちを持つ」機会として生かすこともできるのです。コロナの状況下で生じる様々な事象を見つめ直し、自己変革へのチャンスとして生かそうと「前向きに捉える」ことが、コロナ禍をたくましく、そして生き生きと生き抜く道である、そう信じています。